

小春

国木田独歩

青空文庫

十一月某日、そのひ自分は朝から書齋にこもって書見をしていた。

その書はウォーズワオルス詩集である、この詩集一冊は自分に取りて容易ならぬ関係があるので。これを手に入れたはずでに八年前のこと、忘れもせぬ九月二十一日の夜よであった。ああ八年の歲月！おも憶えば夢のようである。

ことにこの一、二年はこの詩集すら、わずかに二、三十巻しかないわが蔵書中にあつてもはなはだしく冷遇せられ、架上最も塵ちり深き一隅いちぐうに放擲ほうてきせられていた。否いな、一月に一度ぐらいは引き

出されて瞥見べっけんされた事もあつたらう、しかし要するに瞥見たるに過ぎない、かつて自分の眼光を射て心靈の底深く徹した一句一節は空しく赤い線青い棒で標点しるしづけられてあるばかりもはや自分を動かす力は消え果てていた。今さらその理由を事々ことごとしく自問し自答するにも当たるまい、こんな事は初めからわかっているはずである、『マイケル』を読んでリウクの命運のために三行の涙をそそいだ自分はいつしかまたリウクを誘うた浮世の力に誘われたのだ。

そして今も今、いと誇り顔に「われは老熟せり」と自ら許している。アア老熟！ 別に不思議はない、

“Man descends into the Vale of years.”

『人は歳月の谷間へと下る』

という一句が『エクスカルション』第九編中にあつて自分はこれに太く青い線すじを引いてるではないか。どうせこれが人の運おさだまり命めいだろう、その証拠には自分の友人の中でも随分自分と同じく、自然を愛し、自然を友として高き感情の中に住んでいた者もあつたが、今では立派な実際家になつて、他人ひとのうわさをすれば必ず『彼奴きやつは常コンモン識センスが乏しい』とか、『あれは事務家だえらいところがある』など評し、以前もとの話が出ると赤い顔をして、『あの時はお互いにまだ若かつた』と頭をかくではないか。

自分がウォーズウォルスを見捨てたのではない、ウォーズウォルスが自分を見捨てたのだ。たまさか引き出して見たところでは

がわかろう。ウオーズウォルスもこういう事務家や老熟先生にわかるようには歌わなかつたに違いない。

ところで自分免許のこの老熟先生も実はさすがにまるきり老熟し得ないと見えて、實際界の事がうまく行かず、このごろは家にばかり引きこもっていて多く世間と交わらない。その結果でもあろうかうオーズウォルス詩集までが一週間に一、二度ぐらいは机の上に置かれるようになった。

さて十一月某日、そのひ自分は朝から書齋にこもって書見をしていた、とあらためて書き出す。

昨日きのうも今日きょうも秋の日はよく晴れて、げに小春こはるの天気、仕事するにも、散策を試みるにも、また書を読むにも申し分ない気候である。ウォーズウォルスのいわゆる

『一年の熱去り、気は水のごとくに澄み、天は鏡のごとくに磨みがかれ、光と陰といよいよ明らかにして、いよいよ映照みせらるる時』である、気が晴ればれする、うちにもどこか引き緊しまるどころがあつて心が浮わつかない。断行するにも沈思するにも精いっぱいできる。感情も意志も知力もその能を尽くすべき時である。冬はいじけ春はだらけ夏はやせる人でも、この季節ばかりは健康と精力とを自覚するだろう。それで季節が季節だけに自分のウォーズ

ウオルス詩集に対する心持ちがやや変わって来た、少しはしみり
りと詩の旨を味わうことができるようである。自分は南向きの窓
の下で玻璃ガラス越しの日光を避けながら、ソネットの二、三編も読
んだか。そして “Line Composed a few miles above Tintern Abbey”
の雄編に移った。この詩の意味は大略左のごとくである。

五。年。は。経。過。せ。り。しかしてわれ今再びこの河畔かはんに立つてその
泉流の咽むせぶを聴きき、その危巖のそびゆるを仰ぎ、その蒼そうてん天の
地に垂たれて静かなるを観みるなり。日は来たりぬ、われ再びこの
暗く繁しげれる無花果いちじくの樹陰こかげに座して、かの田園を望み、かの果樹
園を望むの日は再び来たりぬ。

われ今再びかの列樹なみきを見るなり。われ今再びかの牧場を見る

なり。緑草直ちに門戸に接するを見、樹林の間よりは青煙閑しずかに巻きて空にのぼるを見る、樵夫しょうふの住む所、はた隠者の独座して炉に対するところか。

これらの美なる風光はわれにとりて、過去五年の間、かの盲者における景色のごときものにてはあらざりき。一室に孤座する時、都府の熱鬧場裡（ねつとうじょうり）にあるの日、われこの風光に負うところありたり、心屈し体倦むうの時に当たりて、わが血わが心はこれらを懐おもうごとうにいかうに甘き美感を享うけて躍りたるぞ、さらに負うところの大なる者は、われこの不可思議なる天地の秘義に悩まざるに当たり、これらの風光を憶（おも）うことによりて、その圧力を支ささえ得たることなり。もしそ

れ。これ。を。憶。う。て。い。い。よ。感。じ。、。瞑。想。（。め。い。そ。う。）。静。思。の。極。に。い。た。れ。ば。わ。れ。実。に。一。呼。吸。の。機。微。に。万。有。の。生。命。と。触。着。す。る。を。感。じ。た。り。き。

もしこの事、単にわが空くう漠ぼくたる信念なりとするも、わが心この世の苦惱にもがき暗あん憚たんたる日夜にちやを送る時に当たりて、われいかにしばしばなんじ汝なんじに振り向きたるよ、ああワイ！ 林間の道遙子（しようようし）よ、いかにしばしばわが心汝に振り向きたるよ！

しかしてわれ今、再びここに立つ。わが心は独ただに今のこの樂しさを感ずるのみならず、実にまた来たるべき歲月におけるわが生命とわが食物とは今のこの時の感得中にあるべきなり。あ

えて望むはその感得の児童の際のごとからんことなり。

あの時は山羊やぎのごとく然しかり山野泉流ただ自然の導くままに逍し

遙ようようしたり。あの時は飛瀑ひばくの音、われを動かすことわが情こころの

ごとく、巖いわおや山や幽ゆうすいなる森林や、その色彩形容みなあの時

においてわれを刺激すること食欲のごときものありたり。すな
わちあの時はただ愛、ただ感ありしのみ、他に思考するところ
の者を藉かり来たりて感興を助くるに及ばざりしなり。されどか
の時はすでに業すでに過ゆぎ逝ゆきたり。

しかもわれはこの経過を唸なげかず哀あは（かな）しまざるなり。わ
れはこの損失を償いて余りある者を得たり。すなわちわれは思
想なき児童の時と異なり、今いは自然を観ることを学まなびたり。今い

や。人。情。の。幽。音。悲。調。に。耳。を。傾。け。た。り。今。や。落。日。、。大。洋。、。清。風。、。蒼。天。、。人。心。を。一。貫。し。て。流。動。す。る。所。の。も。の。を。感。得。し。た。り。

か。る。が。故。に。わ。れ。は。今。な。お。牧。場。、。森。林。、。山。岳。を。愛。す。、。緑。地。の。上。、。窮。天。の。間。、。耳。目。の。触。る。る。所。の。者。を。愛。す。、。こ。れ。ら。は。み。な。わ。が。最。純。なる。思。想。の。錨。、。わ。が。心。わ。が。靈。及。び。わ。が。徳。性。の。乳。母。、。導。者。、。衛。士。た。り。

あ。あ。わ。が。最。愛。の。友。よ。 (妹。ド。ラ。嬢。を。指。す) 、。汝。今。わ。れ。と。共。に。こ。の。清。泉。の。岸。に。立。つ。、。わ。れ。は。汝。の。声。音。中。に。わ。が。昔。日。の。心。語。を。聞。き。、。汝。の。驚。喜。し。て。閃。く。所。の。眼。光。裡。に。わ。が。昔。日。の。快。心。を。読。む。な。り。あ。あ！。わ。れ。を。し。て。し。ば。し。な。り。と。も。汝。に。お。い。て。わ。が。昔。日。を。觀。取。せ。し。め。よ。、。わ。が。最。愛。の。妹。よ。！

者に背（そむ）かざりしをわれ知ればなり。われらの生涯を通じて
 歡喜より歡喜へと導くは彼の特權なるを知ればなり。彼より
 享くる所の静と、美と、高の感化は、世の毒舌、妄斷（もう
 だん）、嘲罵ちようば、輕蔑をしてわれらを犯さしめず、われらの樂
 しき信仰を擾（みだ）るなからしむるを知ればなり。

かるが故に、月光をして汝（妹）の逍遙を照らしめよ、霧深
 き山谷の風をしてほしいままに汝を吹かしめよ。汝今日の狂喜
 は他日汝の裏に熟して莊重深沈なる歡よろこびと化し汝の心はまさたのに
 しき千象の宮、静かなる万籟ばんらいの殿たるべし。

ああ果たしてしからんか、あるいは孤独、あるいは畏懼、あ

るいは苦痛、あるいは悲哀にして汝を悩まさん時、汝はまさにわがこの言を憶おもうべし。

他日もし、われまた汝を見るあたわざるの地にあらんか、汝まさにわれと共にこの清泉の岸に立ちしことを忘るなかれ。

まずザツトこういう意味である。自分は繰り返して読んだ。そしてどういふ句に最も強くアンダーラインしてあるかと見れば、

最初の『五年は経過せり』の一句及び『わが心は独ただに今のこの楽

しさを感ずるのみならず、実にまた来たるべき歲月におけるわが生命いのちとわが食物とは今のこの時の感得中にあるべきなり』の句を

始めとして『自然は決して彼を愛せし者そむに背かざりし』の句のごとき、そして

Therefore let the moon

Shine on thee in thy solitary walk;

And let the misty mountain winds

be free to blow against thee.

の句に至っては二重にも線が引いてある。何のために引いたか、
そもそもまたこの濃い青い線をこれらの句の下に引いたのは、い
つであるか。

『七年は経過せり』と自分は思わず独語した。そうだ。そうだ！
七年は夢のごとくに過ぎた。

三

自分が最も熱心にウオーズウォルスを読んだのは豊後の佐伯にいた時分である。自分は田舎教師としてこの所に一年間滞在していた。

自分は今ワイ河畔の詩を読んで、端なく思い起こすは実にこの一年間の生活及び佐伯の風光である。かの地において自分は教師というよりもむしろ生徒であった、ウオーズウォルスの詩想に導かれて自然を学ぶところの生徒であった。なるほど七年は経過した。しかし自分の眼底にはかの地の山岳、河流、溪谷、緑野、森

林ことごとく鮮明に残っていて、わが故郷の風物よりも幾倍の色彩を放っている。なぜだろう？

『月光をして汝の逍遙を照らさしめ』、自分は夜となく朝となく山となく野となくほとんど一年の歳月を逍遙に暮らした。

『山谷の風をしてほしいままに汝を吹かしめよ』、自分はわが情とわが身とを投げ出して自然の懐に任した。あえて佐伯をもつて湖畔詩人の湖国と同一とはいわない、しかし湖国の風土を叙して

そこには雨、心より降り、晴るる時、一段まばゆき天氣を現わし、鳴らざりし泉は鳴り、響かざりし滝は響き、泉も滝も、水あふるれど少しも濁らず、波も泡も澄み渡り青味を帯べり、

とウオーズウォルスが言いしを真とすればわが佐伯も実にその通りである。

往々雨の丘より丘に移るに当たりて、あるいは近くあるいは遠く、あるいは幽くらくあるいは明らかに、

というもまた全く同じである、もしそれ雲霧うんむを説いて

あるいは黙もくねん然遊動して谷より谷に移るもの、往々にして動かざる自然を動かし、変わらざる景色を変え、塊然たる物象を化して夢となし、幻げんとなし、霊となし、怪となし、

というに至つては水多く山多き佐伯また実にそうである、しかししてわが佐伯をウオーズウォルスの湖国と対照する必要はない。

ノートブック
手帳と鉛筆とを携えて散歩に出掛けたスコットをばあざけり

しウオーズウォルスは、決して写實的に自然を觀てその詩中に湖
国の地誌と山川草木を説いたのではなく、ただ自然その物の表象
變化を觀てその真髓の美感を詠じたのであるから、もしこの詩人
の詩文を引いて対照すれば、わが日本國中数えきれぬほどの同風
光を見いだすだろう。

ただ一言する、『自分が真にウオーズウォルスを読んだは佐伯
における時で、自分がもつとも深く自然に動かされたのは佐伯にお
いてウオーズウォルスを読んだ時である』ということ。

爾來數年の間自分は孤独、畏懼、苦惱、悲哀の**かずかず**を**尽く**
した、自分は決して幸福な人ではなかつた、自分の生活は決して
平坦ではなかつた。『ああワイの流れ！ 林間の逍遙子よ、い

かにしばしばわが心汝に振り向きたるよ！』その通りであった。
わが心はこれらの圧力を加えらるるごとにしばしば藩匠川畔はんの風
光を憶おもった。

今やいかに、今やいかに、わがこの一、二年の生活はほとんど
佐伯を忘れしめ、しかしてたまさかに佐伯を憶えばあの時の生活
はわれながらわれのごとくには思われなくなつた。

四

自分は詩集をそのままにして静かに佐伯のことを憶おもいはじめた。
さすがに忘れ果ててはいない、あの時の事この時のこと、自分の

繰り返した逍遙の時を憶うにつけてその時自分の目に彫り込まれた風光は鮮やかに現われて来る、画を見るよりも鮮明に現われて来る。秋の空澄み渡つて三里隔つる元越山の半腹からまつすぐに立ち上る一縷の青煙すら、ありありと目に浮かんで来る。そこで自分は当時の日記を出して、かしここと拾い読みに読んではその時の風光を思い浮かべていると

『兄さんお宅ですか』と戸外から声を掛けた者がある。

『お上がり』と自分は呼んでなお日記を見ていた。

自分の書齋に入つて来たるは小山という青年で、ちょうど自分が佐伯にいた時分と同年輩の画家である、というより画家たらんとて近ごろ熱心に勉強している自分と同郷の者である。彼は常に

自分を兄さんと呼んでいる。

『ご勉強ですか。』

『いや、そうじゃアない、今ウオーズウォルスを読んで佐伯のことを思い出したから日記を見ていたところだ。』

『どうです散歩にお出になりませんか、今日は写生しようと思つて道具を持って来ました。』

『なるほど、将^{しょうぎ}几ができたね。』

『やっと買いました、大枚一円二十五銭を投じたのですがね、未^{いま}だ一度しか使つて見ません。』

と畳んで棒のごとくする櫛^{かし}の将几を開いて見せた。

『いよいよ本式になったナ』と自分は将几と小山とを見比べて言

った。

『そうです、もうここまで行けば後へは退けません』と言いつ放つたが何となくかれの顔色はすぐれなかつた、というものはそのはずだ、彼は故郷なる父母の意に反してその将来を決しているからである。画えに対する彼の情は燃ゆるようで、ほとんど本気のさたかと彼の友は疑うほどである。これまで彼は父母の意に従つて高等学校に入るべき準備をしていた時でも、三角に対する冷淡は画に対する熱心といつても両極をなしていた。さらにさかのぼつて、彼の小学校にある時すら彼は画のみを好んでおつたのを自分は知つてゐる。この少年に向かつて父母は医師たらんことを希望しているのである。彼は父母の旨を奉じて進んで来た。しかるに幸か

不幸か、彼の健康はいかにしても彼の嗜好しこうに反する學術を忍んで学ぶほどの弾力を有していない。彼は二年間に赤十字社に三度入院した。医師に勧められて三度湯治とうじに行つた。そしてこの間彼の精神の苦痛は身体の病苦と譲らなかつたのはすなわち彼自身その不健康なるだけにいよいよ将来の目的を画家たるに決せんと悶もがいたからである。

それでこのごろは彼も煩はん悶もんの時を脱して決心の境に入り着々その方に向かつて進んで来たが未だ故郷いまの父母にはこの決心を秘しているのである。彼がややもすると不安の色を顔に示すはこの故である。

『十二画のためになら倒れてやむだけの覚悟はもう決めています

から平気です、』と彼は言いだしてさびしく笑った。

『君のことだからそうだろう。』

『そうですとも、ほんとにね兄さん、昨日も日が西に傾いて窓から射しこむと机の上に長い影を曳いて、それをぼんやり見ていると何だか哀れっぽい物悲しい心持ちがして来ましたが、ふと画の事を考えて、そうだ今だとすぐ画板を引つ掛けて飛び出しました。画のためとなら小生わたくしはいつでも気が勇み立ちます、』と行って彼はその蒼白あおしろい顔に得意の微笑を浮かべた。

彼は画板の袋から二、三枚の写生を取り出して見せたが、その進歩はすこぶる現われて、もはや素人しろうとの域を脱しているようである。

『どうです散歩に出ましよう、今日は何だか霞かすみがかつてまるで春のようですよ。』と小山は自分を促した。

『そう、もうじき昼だから飯を食つてからにしよう』と自分は小山を止めて、それよりウオーズウォルスの詩について自分の観みるところを語つた。

『ちようど君の年だつた、僕がウオーズウォルスに全心を打ちこんだのは。その熱心の度は決して君の今画に対する熱心に譲らなかつた。君が画板を持つて郊外をうろつきまわっているように、僕はこの詩集を懐ふところにし佐伯さんやの山野を歩き散らしたが、僕は今もその時の事を思いだすと何だか懐なつかしくつて涙がこぼれるような気がするよ』と自分はよい相手を見つけたので、さつきから独ひとりで

憶い浮かべていた佐伯の自然について、図まで引いて話しだした。同じ自然の崇拜者である、彼は画によつて、自分は詩に導かれて。自分の語るところは彼によくわかる。彼の問うところは自分の言わんと欲するところ。

『まずそんなあんばいでただもう夢中であつた。しかし君と異うのは、君は観るとすぐ画きたくなる僕はただ感ずるばかりだ。それで君は時とすると自然の美のあまりに複雑して現われているのに圧倒せられてしまふ、僕にはそんなことはない、君は自然を捉えようと試みる、僕は観て感じ得るだけを感じずる、だいぶ僕の方が楽だ。時によると僕も日記中に君の見取り図くらいなところを書きとめたこともあるが、それは真の粗雑としたものだ。』

『そのスケッチが見とうございますね、』と小山の求めるままに十一月三日の記から読みだした。

『野を散歩す日ひらら暖かにして小春の季節なり。櫛はじもみじ紅葉は半ば散り

て半ば枝に残りたる、風吹くごとに閃ひらめき飛ぶ。海近き河口に至

る。潮退ひきて洲すあらわれ鳥の群ぐん、飛び回る。水門を下ろす童子どうじあ

り。灘なだむら村に舟を渡さんと舷ふなばたに腰かけて潮の来るを待つらん若者

あり。背低き櫛堤はむつみの上に樹たちて浜風に吹かれ、紅くれないの葉ごとに光を

放つ。野末はるかに百舌鳥もすずのあわただしく鳴くが聞こゆ。純まつしろ白

の裏羽を日にかがやかし鋭く羽風を切つて飛ぶは魚鷹みぎやいこなり。その

昔に小さき島なりし今は丘となりて、その麓ふもとには林を周めぐらし、山や

鳩まぼとの栖処ねぐらにふさわしきがあり。その片陰に家数かず二十には足らぬ

小村あり、浜風の衝しように当たりて野を控ゆ。』

その次が十一月二十二日の夜

『月の光、夕ゆうべの香をこめてわずかに照りそめしころ河岸かわぎしに出いず。村々浦々の人、すでに舟とともに散じて昼間のさわがしきに似にずいと寂さびたり。白馬一匹つな繋つなぎあり、たちまち馬子まご来たり、牽ひいて石級いしだんを降くだり渡し船に乗らんとす。馬懼おそれて乗らず。二三の人、船と岸とにあつて黙してこれを見る。馬ようやく船に乗りて船、河の中流に出いずれば、灘なだやま山の端を離れてさえさえと照る月の光、鮮やかに映りて馬白く人黒く舟危うし。何心なくながめてありしわれは幾百年の昔を眼前に見る心地こころちして一種の哀情を惹ひきぬ。船回めぐりし時われらまた乗りて渡る。中流より石級の方を望めば理髮

所の燈火あかり赤く四圍あたりの闇やみを隈くまどり、そが前おもを少女おとめの群れゆきつ返り
つして守もり唄うたの節ふし合わするが聞きこゆ。』

その次が十一月二十六日の記、

『午後土河内村どごうちを訪とう。堅田トシネル隧道の前を左に小径こみちをきり坂を越
ゆれば一軒の農家、山の麓ふもとにあり。一個の男、一個の妻、二個の
少女麦の肥料を丸めいたり。少年あり、藁わらを積み重ねし間より頭
を出して四人の者が余念なく仕事するを余念なくながめいたり。
渡頭わたしを渡りて広き野に出いず。野は麦まきに忙しく女子みな男子と
共に働はたらきいたり。山の麓に見ゆるは土河内村なり、谷迫りて一寰か
区くをなしことさらに世と離れて立つかのごとく見ゆ、かつて山の
頂いただきより遠くこの村を望み炊煙の立ちのぼるを見てこの村懐かしく

われは感じぬ。村に近づくにつれて農夫ら多く野にあるを見たり。静けき村なるかな。小児の群れの嬉戯きぎせるにあいぬ。馬高くいななくを聞きぬ。されど一村寂然たり。われは古き物語の村に入りがごとき心地せり。若者一個庭前にて何事をかなしつつあるを見る。礫こいし多みちき路に沿いたる井戸の傍かたわらに少女おとめあり。水枯れし小川の岸に幾株の老梅並び樹たてり、柿かきの実、星のごとくこの梅樹うめの際きわより現ある。紅葉もみぢ火のごとく燃えて一ひとむら叢の竹林を照らす。ますます奥深く分け入れれば村窮きわまりてただ溪流の水清く樹林の陰より走はせ出いずるあるのみ。帰路せきよう夕陽野せきようにみつ』

自分は以上のほかなお二、三編を読んだ。そしてこれを聴きく小山よりもこれを読む自分の方が当時を回想する情に堪たえなかつた。

時は忽然こつぜんとして過ぎた、七年は夢のごとくに経過した。そして半熟先生ここに茫然ぼうぜんとして半ば夢からさめたような寝ぼけ眼まなこをまたたいている。

五

午後二人ふたりは家を出た。小山は画板を肩から腋わきへ掛け、畳将たたみしようぎ几ぎを片手に、薬くすり 壘びんへ水を入れてハンケチで包んだのを片手に。自分はウオーズウォルス詩集ふところを懐ふところにして。

大空は春のように霞かすんでいた。プルシヤンブリューでは無論なしコバルトでも濃い過ぎるし、こんな空色は書きにくいと小山は

つぶやきながら行つた。

野に出て見ると、秋はやはり秋だ。 ならばやし 櫛林は薄く黄ばみ、農

家の周囲に立つ高い櫛けやきは半ば落葉してその細い網のような枝を空にすかしている。丘のすそをめぐる萱かやの穂は白銀しろかねのごとくひかり、その間から武蔵野むさしのにはあまり多くない櫛はじの野生がその真紅の葉を点てんしゆつ出している。

『こんな錯雑した色は困るだろうねエ』と自分は小さな坂を上りながら頭上の林を仰いで言つた。

『そうですね、しかしかえつてこんな色の方がごまかされて描かきよいかもしれません、』と小山は笑いながら答えた。

『下手へたな画工が描かきそうな景色というやつに僕は時々出あうが、

その実、実際の景色はなかなかいいんだけども。』

『だから下手が飛び付いて描くのですよ、自分の力も知らないで、ただ景色のいいに釣られてやるのですからでき上がって見ると、まるで景色の外うわつら面なすくを塗抹ぬりつた者になるのです。』

『自然こそいい迷惑だ、』と自分は笑った。高台に出ると四辺あたりがにわかにに開けて林の上を隠みえがくれ見みに国境の連山かすが微かすかに見える。

『山！』と自分は思わず叫んだ。

『どこに、どこに、』と小山はあわただしく問うた。自分の指さす方へ、近眼鏡を向けて目をまぶしそうにながめていたが、

『なるほど山だ、どうですこの瞬かすかな色は！』とさも懐なつかしそうに叫んだ。

この時自分の端なく想い出したのは佐伯にいる時分、元越山の絶頂から遠く天外を望んだ時の光景である。山の上に山が重なり、秋の日の水のごとく澄んだ空気に映じて紫色に染まり、その天末に糸を引くがごとき連峰の夢よりも淡きを見て自分は一種のメランコリーを催し、これら相重なる山々の谷間に住む生民を懐わざるを得なかつた。

自分は小山にこの際の自分の感情を語りながら行くと、一條の流れ、薄暗い林の奥から音もなく走り出でまた林の奥に没する畔に来た。一個の橋がある。見るかげもなく破れて、ほとんど墜ちそうにしている。

『下手な画工が描きそうな橋だね』と自分は林の陰からこれを

望んで言った。

『私が一つ描いて見ましようか。』

『よしたまえな、ありふれてるから。』

『しかしこんな物でも描かなければ小生の描く物がありません。』

そこで小山はほどよき位置を取って、将几を置き自分には頓

着なく、熱心に描き始めた。自分は日あたりを避けて檜

林の中へと入り、下草を敷いて腰を下ろし、わが年少画家の

後ろ姿を木立ちの隙からながめながら、煙草に火をつけた。

小山は黙って描く、自分は黙って煙草をふかす、四囲は寂然

として人声を聞かない。自分は懐から詩集を取り出して読みだ

した。頭の上を風の吹き過ぎるごとに、檜の枯れ葉の磨れ合う音

ががさがさとするばかり。元来この櫨はあまり風流な木でない。その枝は粗、その葉は大、秋が来てもほんのりとは染まらないで、青い葉は青、枯れ葉は枯れ葉と、乱雑に枝にしがみ着いて、風吹くとも霜降るとも、容易には落ちない。冬の夜よあらし嵐吹きすさぶころとなつても、がさがさと騒々しい音で幽遠の趣をかきみだ擾してゐる。

しかし自分はこの音が嗜すきななので、林の奥に座して、ちよこなんとしていると、この音がここでもかしこでもする、ちようど何かがささやくようである、そして自然の幽ゆうじゃく寂がひとしお心にしみわたる！

自分はいっしか小山を忘れ、読む書にもあまり身が入らず、た

だ林の静けさに身をまかしていると、何だか三、四年前^{ぜん}まで、自分の胸に響いたわが心の調べに再び触れたような心持ちがする。

『兄さん!』と小山は突然呼んだ、『兄さん、人の一生を四季にたとえるようですが、春を小生^{わたし}のような時として、小春は人の幾歳ぐらいにたとえていいでしょう』と何を感じたか、むこうへ向いたまま言った。

『秋かね?』

『秋と言わないで、小春ですよ!』

『僕のようなのが小春だろう!』と自分は何心なく答えて、そしてわれ知らず、未^{いま}だかつて経験した事のない哀情が胸を衝いて起こった。

『君が春なら僕は小春サ、小春サ、いまに冬が来るだろうよ！』
『ハハハハ冬が過ぎればまた春になりますからねエ』と小山は
さも軽々^{かるがる}と答えた。

四^{あたり}囲は再びひっそりとなった。小山は口笛を吹きながら描いて
いる。自分は思った、むしろこの二人が意味ある画題ではないか
と。

(明治三十三年十一月作)

青空文庫情報

底本：「武蔵野」岩波文庫、岩波書店

1939（昭和14）年2月15日第1刷発行

1972（昭和47）年8月16日第37刷改版発行

2002（平成14）年4月5日第77刷発行

底本の親本：「武蔵野」民友社

1901（明治34）年3月

初出：「中学世界」

1900（明治33）年12月

入力：土屋隆

校正：門田裕志

2012年8月7日作成

2012年9月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

小春

国木田独歩

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>